

ツクヅクホシイ

村上 ときみ

「じゃ、また明日」

「じゃあな、ダイキ」

暗くなるにはまだ早いけど、夕焼け小焼けのメロデイが流れ始めたので、僕達は帰るところにした。

ススムとシンゴは公園のあっち側の出口に、僕は反対側の出口に向かって歩き出した。

僕達は、今日もこの中央公園のベンチでカードゲームをして遊んでいたんだ。

「今日は王者ベルーラのカードが大活躍したなあ。ススムには今までずっと負けてたけれど、今日は勝ててうれしかったな」

光り輝く大きな剣を持ち、かっこ良く立つベルーラのカードを僕は高く上げて、にっと笑った。

と、その時、

「気を付けな。とられちゃうぞ」

という声がした。

声のする方を見ると、そこには一羽のカラスがいた。

「わっ、カラスがしゃべった」

びっくりした僕は、びくと体をふるわせると立ち止まった。

それから、右手をさっとおろして、持っていた二十枚のカードと合わせてぎゅっとにぎりしめた。

「カカカ。オレがとるんじゃないよ」

「じゃあ、誰がとるって言うんだよ」

まわりを見ながら、僕はカラスをにらんだ。公園にはもう誰もいない。

「よく耳をすましてみろよ」

カラスが、落ち着いた声で言う。

『ジッ　ジッ　ジッ　ジッ』

『ミーン、ミーン、ジジジ』

『オーシン　ツクツクツク　ツクツクボウシ

ツクツクボウシ』

『ロロロロロ』

いろんな虫の鳴き声が聞こえてくる。
木が何本も植えられている公園の中は、虫
の声でにぎやかだった。

僕がずっと耳をすましているのを見て、

「聞こえないのか？」

と、カラスが聞いてきた。

「何がだよ？」

僕は、カラスを怪しんでいた。

「何がって。『ツクヅクホシイ』だよ」

「ツクヅクホシイ？」

僕は首をかしげた。

耳をすましても

「ツクツクボウシ」の声しか聞こえてこない。

僕が真面目な顔で耳をすましていると、

「これだから、人間の耳はダメなんだ。オレ
達みたいに、繊細にできてないからな」

カラスは、あきれたように言った。

「ツクツクボウシじゃなくて、一匹だけ『ツ
クヅクホシイ ツクヅクホシイ』って鳴いて
るのを、聞きわけられないなんて」

「なんだよ。それ」

僕は、冷たく言った。

「セミの一種だけだな。あんまりいないし、この通り、人間には聞き分けられないから、ツクヅクホシイがいることを知らないんだ」

カラスは、首を左右にふる。

「ツクヅクホシイは、どのセミよりも土の中にいる時間が長い上に、地上では二、三日しか生きられないから、何でも欲しがらる欲張りセミだ。だから、気を付けな。あつという間に、とられるから。オレはこの公園にずっといたから、今日羽化したのが一匹いるのを知ってたんだ」

「ふーん。それにしたって、なんで、親切にそんなことを教えてくれるんだよ？」

信じられない話に、僕はますますカラスを怪しんだ。

「なんだって。ツクヅクホシイにとられて困ってる虫達や人間を何度も見てきたからだよ。だから、ツクヅクホシイにとられた物を、取

り返してあげて、何を商売にしているのさ」

カラスはえらそうに言った。

「取り返す？ さっきから、とられる、とられるって、一体何をとられるのさ？ それで、どうやって、取り返すのさ？」

「まだ信じてないのかい」

カラスがクカツと笑う。

（やっぱり何か変だぞ・・・）

僕はそう思うと、

「忠告ありがとう。でも、僕はまるつきり信じてないよ。それに僕は大丈夫だから」

そう言って、手に持っているカードをもう一度ぎゅつとにぎりしめると、歩き出した。

「ま、せいぜい気を付けるんだな」

カラスがぼそつとつぶやいた。

「フン」

僕は鼻で返事をしてから、歩き出した。

けれど、もしかしたら後ろから、急にカラスにおそわれるんじゃないかと、本当はビクビクしていた。

それで、だんだん早足になっていった。

背中の方に神経を集中させているけれど、カラスがおそってくる気配はない。

（でも、公園から出るまでは、安心できないぞ）

そう思って、思い切って、出口に向かって走り出そうとした瞬間、

「ブーン」

と何か後ろから飛んできて、僕の頭上ギリギリをかすめて飛んで行った。

「わっ」

カラスがついに来たかと思って、僕は首をすくめて、目をつぶった。

けれど、何秒過ぎても、それ以上のことは起こらなかった。

（カラスにしては、小さ過ぎたしな・・・）

僕は、おそるおそる目を開けてみた。

空がほんのりオレンジ色に変わってきているだけで、何も変わった様子はない。

（何でもなかったんだ）

ふうっとため息をついて、僕がまた歩き出
そうとした時、

「ほーら、とられた」

後ろで声がした。

僕が振り向くと、さっきのカラスがそこに
いた。

「えっ？とられた？」

僕は、おどろいて手を開いてみた。

（大丈夫。カードはとられてないぞ。今日は
他になんにも持ってこなかったから、とられ
る物なんて何もない。帽子だってかぶってな
いし・・・）

僕は、眉間にしわを寄せて考えた。

「そんなカードをツクヅクホシイはとらない
さ。セミがカードをとったって、何にもなら
ないだろ。第一、小さなセミが、そのカード
をどうやって持っつていうのさ」

カラスのバカにしたような口調に、むっと
なった。

「じゃあ、何をとられたっていうんだよ」

僕が強気で言う。

「もっと大切なものさ」

「大切な物？」

僕は首をかしげた。

（他に何にも持ってない・・・やっぱり怪しいカラスだ）

僕は、カラスをキツとにらんだ。

（でまかせカラスめ）

そう心の中で言った後で、僕がくるりと向きを変えると、

「君の名前は、なんて言うのさ？」

カラスが聞いてきた。

「そんなこと、カラスには関係ないだろ」

僕は、はき捨てるように言った。

「ま、いいから。とりあえず教えてくれよ」

カラスが、僕をなだめるように言う。

「名前を聞いたって、何もしやしないよ。ただ知りたいただけだ」

カラスがやさしい声で言うので、名前くらいならいいかと僕は思い直すと、

「岡田……」

とつぶやいた。

けれど、苗字まで言って、僕は言葉にまつてしまった。

「岡田……」

僕の顔が、サーっと青くなっていく。

「岡田……」

（なぜだかわからないけど、名前が思い出せない……）

僕は、ちよつとパニックになって、自分の頭をコツンコツンとたたいた。

けれど、何度思い出そうとしても、自分の名前を全然思い出せないんだ。

「ほらね。とられてる」

カラスは、勝ち誇ったように言った。

「さつき、君の頭をかすめて行った時に、ツクヅクホシイが君の名前をとっていったのさ

」

「名前を？」

僕はカラスをじっと見つめた。

「またそんなウソについて・・・」

「ウソじゃないさ。自分の名前を思い出せないのが、いい証拠だろ。とられたから、思い出せないんだ。今の君は、名無しの人間なんだよ」

まん丸の目で、カラスも僕をじっと見た。

その目がとても真剣だったから、

（カラスの言うことは、本当なのかもしれない・・・）

と、僕は不安になってきた。

「でも、なんで名前を・・・」

「欲しいからに決まってるさ。人間は名前を持っているけれど、ツクヅクホシイには名前がない。ほら、さつき、友達と名前を呼びあって、楽しそうに遊んでただろ。あれを見て、ツクヅクホシイは、名前をとってやろうと決めたのさ。名前があれば、一緒に遊べるとでも思ったんじゃないのかな。だから、『ツクヅクホシイ ツクヅクホシイ』としきりに鳴っていたんだ」

僕に負けてくやしそうなススムが、何度も何度も僕の名前を叫んでいた姿を思い出した。

けれど、相変わらず、自分の名前は思い出せないままだ。

「ツクヅクホシイは、欲しいと思った物をおすすめとっていくのがうまいんだ。例えば、バツタからきれいな緑色をとって、自分の体を緑にしたこともある。コオロギからは、長い触角をとって、自分の頭に付けたこともあったよ」

ゆつくりと話すカラスとは反対に、自分の名前が全然思い出せない僕は、だんだんあせってきた。

「どうやったら、取り返せるんだよ？」

僕が低い声で言うと、

「それは企業秘密さ」

カラスが、カカカとまた笑った。

「教えてよ」

僕はちよつと泣きそうになっていた。

「言っただろ。これは商売なんだ。取り返し

た時には、それなりの報酬をもらわないと」

カラスが、羽をバサッと広げた。

僕はびくつとふるえながら、

「報酬って何だよ？」

と聞いた。

「例えば、君が今持つてるそのカードはどうだい？」

カラスは広げた羽で、僕の手元を指した。

僕は手の中のカードをちらりと見て少し悩んだ後で、

「わかった。いいよ。取り返してくれたら、このカードをあげるよ」

と言いながら、カードの中から、羊の皮をかぶった戦士がチェーンを持っているカードを選ぶと、カラスの前に差し出した。

けれど、カラスは首をちよこん、ちよこんとかしげながら、そのカードを見た後で、
「これじゃ、ダメだ。なんか弱そうじゃないか」

と言った。

「じゃ、じゃあこれでどう」

僕は、次のカードをカラスに差し出した。

ドラゴンの形をしたロボット戦士が、火を噴きながら空を飛んでいるカードだ。

カラスは、またちよこんと首をかしげながら、カードを見た後で、

「これでもない」

と首を横にふった。

「じゃあ・・・」

僕がカードを選び直していると、

「さっき笑いながら見てたカードがあるだろ。

王者ベルーラとか言ってたやつだよ。あれが
いい」

と、さらりとカラスが言った。

（なんで知ってるんだよ。どこから見てたんだ・・・）

僕の体が固まった。

「え・・・でも、これは・・・」

今日大活躍した王者ベルーラのカードは、
一番のお気に入りカードだ。

僕はとまどった。

そして、

「これは、ダメ・・・」

僕はうつむきながら、首をぶんぶんとふつた。

「ふーん。じゃあ、名前が戻らなくてもいいんだ」

カラスの声は、意地悪そうに僕の耳に響いた。

「これは一番大切なカードだから・・・」

僕が声をふりしぼって言うと、

「名前とカードと、どっちが大切なんだよ？」

「カラスは僕の顔をのぞきこみながら、言った。」

「まあ、ツクツクホシイが土に帰る時、とつた物を手放すからね。そうすれば、名前は戻って来るけれど、二、三日は、とられたまま辛抱することになる」

「本当！二、三日すれば、名前が戻って来る

んだ」

名前が戻ってくると聞いて、僕はうれしくなつて、大きな声をだした。

（二、三日の間なら平気さ。名前がなくなつて、きつとなんとかなる）

一筋の光が差ししてきたような気持になつた。

「安心するのは、まだ早いよ。二、三日名前がないってのは、けっこう困るもんなんだぜ。

それに取り返して欲しいなら、ツクヅクホシイがまだこの公園いる今のうちだ。どっかに飛んでいっちまったら、時間が経つのを待つしかない」

カラスはいたって冷静だった。

（家に帰って、ノートを見れば名前が書いてあるはずだし、教科書にだって、名前が書いてある。それに、帰れば、お母さんが僕の名前を呼んでくれるに決まつてる。今思い出せなくても、なんとかなるぞ）

僕はこくと一度うなづくくと、

「とにかく家に帰る」

と、言っただけで急に走り出した。

「じゃあ、またな」

カラスはこう言ってから、カアアと大きな声で鳴いた。

家は公園のそばだったけれど、一秒でも早く家に帰りたくて僕は必死に走った。

そして、玄関のドアを勢いよく開けて、

「ただいまー」

と大声で言いながら、台所に走って行った。

「どうしたの。どすどす走って。そんなにおなかですいてるの・・・」

と言った後で、お母さんが右手で口を押えてだまってしまった。

「あら、いやだ・・・」

そう言いながら、お母さんがじいっと僕の顔を見ている。

「ど・・・どうしたの？」

僕の声がふるえた。

「どうしちゃったのかしら？あなたの名前が思い出せないの・・・」

お母さんの言葉を聞いて、僕はごくりとつばを飲みこんだ。

それから、今度は急いで階段を上がって、自分の部屋へと向かった。

「一日中忙しかったから、疲れちゃったのかしらね・・・」

階段の下で、お母さんが不安気につぶやいていた。

僕は机の上にカードを置くと、あわててランドセルの中に入っている教科書を取り出して見た。

けれど、国語の教科書の後ろには「岡田」と苗字が書いてあるだけだった。

（そんな・・・）

僕は、次にあわてて算数のノートをつかんで表紙を見た。

けれど、やっぱり「岡田」と苗字が書いてあるだけだ。

他のノートや教科書を次々と見ていったけれど、やっぱり苗字だけで名前が書かれてい

なかった。

（名前がない・・・）

僕は、がつくりと肩を落とした。

「大切な名前を思い出せないなんて、ほんとどうしちゃったのかしらね・・・」

僕の部屋に入ってきたお母さんは、コンと自分の顔をたたくと、泣きそうな顔をした。

「何度も呼んできたはずなのに、変よね・・・」

・
」

お母さんの顔が、青白くなっていくのがわかった。

「お母さんが変なんじゃないよ。違うんだよ。

これは、ツクツクホシイのせいなんだ。ツクツクホシイが僕の名前をとったから・・・」

僕がもごもご言うと、

「え、何？何を言ってるの」

お母さんが、目をぱちくりさせた。

「とにかく、お母さんが悪いんじゃないよ」

僕はこれだけ言うと、机の上のカードを一枚だけ持って、部屋を飛び出した。

そして、階段をかけおり、家を飛び出した。
向かうのは、もちろん公園。
ぼくはまた全速力で走った。

「ハア、ハア、ハア」

うす暗くなり始めた公園に僕が着くと、待
ってましたというように、どこからともなく
カラスが飛んできて僕の前におりた。

「な、よくわかっただろ」

カラスは、太いくちばしを僕に向けた。

「うん」

僕は弱々しくうなづくとき、

「ほら」

すぐに、カードをカラスに差し出した。

「ああ、いいねえ。王者ベルーラは、やっぱ
り強そうだ」

カラスが、カカカと満足そうに笑う。

「まだ、ここにツクヅクホシイはいるんだろ
？早く名前を取り返してよ」

僕の目には、うつすら涙が浮かんでいる。

「ああ、まだいるとも。さっきまで『ツクヅ

クホシイ』とまた鳴いてたからね。欲張りなヤツだ」

カラスは自信満々だ。

「なら、早く」

僕は王者ベルーラのカードを、カラスの前の地面においた。

「よし。本当に取り返して欲しいようだな」

カラスが、地面を見つめた。

「早くってば、早く」

僕は、右足で地面を三回踏みしめた。

「わかった。わかったよ」

カラスはこう言った後で、

「取り返すから、あのはしっこにあるすべり台の後ろにでも隠れてな」

すべり台の方をくちばしで指した。

（このままカードだけ持って逃げるんじゃないだろうな）

と僕が疑って動かないでいると、

「安心しな。こう見えても、仕事はきちんとやりとげるさ」

カラスに心の中を読まれていたのを恥ずかしく思った僕は、

「・・・。ああ」

とだけぼそりと言って、すべり台の方に歩いて行った。

僕がすべり台の後ろに隠れたのを、カラスは確認すると、すぐに、

「ダイキ！ダイキ！」

と、カラスが叫び始めた。

「ダイキ、いるんだろ。隠れてないで、こっちに来いよ。一緒に遊ぼうぜ」

と、叫んでいる。

『一緒に遊ぶ』？カラスのやつ、何を言い始めたんだ」

すべり台の後ろで、僕がギリギリと歯をくいしばっていると、

「ジー」

と鳴きながら、何かがカラスの方に飛んで行くのが見えた。

（ん？あれが、ツクヅクホシイ？）

群青色に包まれ始めた公園の中で、僕は目をこらして見つめた。

そして、

（じゃあ、ダイキってというのが僕の名前なのか？）

僕は、あごに手をあてて考えた。

カラスの目の前までやってきたツクヅクホシイに、

「やあ、ダイキ。ダイキって、いい名前だなあ」

カラスが話しかけている。

「ジー、ジー」

うれしそうに、ツクヅクホシイが鳴いた。

と、その瞬間、

「しかし、そのいい名前は、お前が人間からとったんだよな」

カラスはこう言い、その大きな羽を広げるとバサッと羽をふった。

「ジッ・・・」

ツクヅクホシイは、カラスの羽で、あつと

いう間に地面にふり落とされていた。

それを、すばやくカラスは右足で軽くふみつけるのと、逃げられないようにした。

「ジジジジ」

ツクヅクホシイは、カラスの足の下で、逃げようと動き回って、あばれているようだった。

「さ、盗んだ名前を持ち主に返しな」

カラスがこう言っても、ツクヅクホシイは、ジジジと鳴きながら、逃げ出そうと動き続けているだけだった。

「早く返さないと、もっと足に力を入れてふみつぶすか、このがんじょうなくちばしでつくことになるぞ。今日羽化したばかりなのに、もう土に帰ることになるのは、ちよっと早過ぎるんじゃないか」

カラスが、ツクヅクホシイをおどし始めた。

「第一、名前なんて持ってたって、仕方ないだろ。名前なんてあったって、おなか一杯になるわけじゃないんだ。さ、そんな物、早

く返すことだな」

カラスはこう言うと、右足にちよつと力を入れた。

すると、ツクヅクホシイは、動き回れなくなったようで、あばれるのをやめておとなしくなった。

そして、すぐに、

「オシー　ツクヅクヅク

オシー　ツクヅクヅク

ツクヅクオシイ　ツクヅクオシイ

オシイ　オシイ　ケドケドケド」

と悲しそうな声で鳴き始めた。

その時、

「おーい、隠れてないで、もう出てきていいぞ」

僕は、カラスに呼ばれた。

「やっとツクヅクホシイが、名前を返したよ
うだ。ほら、君の名前を言ってみろよ」

カラスが僕に言った。

僕は、こくりとうなづいてから、

「僕の名前は・・・」

ゆっくり、話し始めた。

「僕の名前は、岡田ダイキ」

僕の口から、いつものようにすらっと名前が出てきた。

「やったあ、名前が戻ってきたみたいだ！すつと名前が出てくるよ。ありがとう」

僕はカラスにお礼を言うと、家に向かってたつとかけ出した。

「お母さん、もう大丈夫だよ」

走りながら、僕は叫んだ。

後ろの方では、ジジッと何かが飛び去っていく音が聞こえてきた。

「ただいま」

僕が家のドアを開けると、お母さんが玄関で僕を待っていた。

「おかえり、ダイキ。ダイキ、ダイキ」

お母さんは、何度も僕の名前を呼ぶと、ふわっと笑った。

「さっきは名前が思い出せなくて、ごめんね。」

お母さん、どうしちゃったのかしらね」

申し訳なさそうにうつむいた顔は、悲しそうだった。

「忙しくて、きつと疲れてただけだよ。だから、僕の名前が出てこなかったんだ。先生だって、生徒の名前をど忘れすることもあるよ。だから、心配ないよ。大丈夫だよ」

僕はにっこり笑った。

次の日のことだ。

「今日も公園に集合しような。今日はぜったい負けないぞ」

ススムに言われて、僕達は今日もまた公園で遊ぶことになった。

僕が公園に早めに到着すると、カラスがまたどこからともなく飛んできた。

「昨日は、本当にありがとう」

僕は、カラスにお礼をもう一度言った。

「いやいや、あれは商売だから」

カラスは、照れくさそうだった。

「だけど、今日はもう大丈夫。戻ってきた名前をまたとられないように、ツクヅクホシイには十分気を付けるし……」

とここまで言うのと、

「今日は、商売の話じゃないよ」

カラスは昨日と違って、なんだかもじもじしている。

「じゃあ、何だよ」

「あ……うん……」

カラスの様子がなんだか変だ。

「何だよ？ どうしたのさ」

僕が問いつめると、

「後で……。友達と遊び終わった後でいいからさ。今度は、オレと一緒に遊んでくれよ」

カラスがそつと言った。

「オレも一枚カード持ってるし……」

今日のカラスは、昨日とちがって、なんだかかわいらしい。

「ああ、いいよ」

僕がすぐに答えると、

「本当に、本当か。オレと遊んでくれるのか
！」

カラスは、ぴよんぴよんとびはねてよろ
こんだ。

そんなカラスを見て、僕は思い出したこと
があった。

「そういえば、昨日の夜、ベッドに入っ
てから思ったんだけどさ。ツクヅクホシイは、君
からは何もとらないのかな？」

僕の質問に、

「オレから何をとりつていうのさ。こんな太
いくちばしをとつてもどうしようもないし、
真っ黒な色なんか、きつと欲しくないんだろ
」

カラスが、さびしそうにつぶやいた。

「そうかな。僕がツクヅクホシイだったら、
とるんだけどな」

「何をだよ」

カラスが、首をちょこんとかしげる。

「勇気を持ってるじゃないか。まるで王者ベ
ルーラみたいだよ」

僕がくすつと笑うと、カラスはクワア、ク
ワアとくすぐつたそうに笑った。